

歴代滑稽百傳

全

~ 5  
711





利門  
跡 711  
卷

東京生達區大佛  
餘下町百拾貳番地  
坪内雄蔵

神田  
相田  
川  
同

歷代滑稽傳

五老井 一選

一日本 非謬の始 伴誓諾尊 伴誓母尊 天の浮橋のりともて

阿方うきーにえやうまー乙女小阿比ぬ

男神

阿方うれー 小為やう海ー 男小逢ぬ

女神

伴誓段々口傳

一非謬の連歌ハもと奉式連系百韻集ニ後文甚多 伴誓子をも

立本折越阿方うをも囁む九月花比教はなく我傳のひが

ちりしを阿方びらると其後百韻一卷一巻千句ふど書

付侍るりハ伴誓守武の比より始りたり今世子守武

明治二十六年十一月五日  
坪内雄蔵氏寄贈



千日とて名ありナゲ 奉白に天文九年 時雨降比と何れも大神  
年教百七年 案に及ぶ

一伴勢の守武に神職の人能護り長しを末世言祖と稱を

千の巻改  
五物抄やかろくしくも神のま

青柳の眉かく岸はひとひりな

名恋るや柳を霞秋の月

澄ふんむ金はちかりの声

らま虫也るを舟結やふりる

よわ何ちこちかけ廻りつ

舟よりもなをつれあすの膝ヒガのふし

附の  
七夜とふり今的事一あり

舟より六日よるも程もなり

又  
きつる身ゆる雲の夕くれ

「の祈やめつきをきりて何なり」

又  
元多る大刀の燕ふくころ

手習いおど何まき何る由ふり

何かりあんとや

其は前日の噂并祈のせさくも形



一山傍に宗鑑のまゆみありて入道一々の名に連歌のまゆみ出  
しそまの紙短冊おかし後御法師と成て大筑波集を撰す

天神を梅の南にありて花もなり

手をついてま申上りて野うね

月と柄をまゝあはれはよき(園式)

妻如野のりんぎのりたり

まぐはくしし袴を我着る

日本れりの口の廣りまよ

大座をこけりしや香ぬる

吉野の山をこゆる商人

妻立とふまわりありて称

一伴知山田の望王モウ一盲人之古き俳諧の名あり大む神守并宗鑑

を授あふ

天神を御書

梅の枝や此節あり

あうとひまの跡を老来

長弟なるまの跡の母をの

月小なりしを構ふ高梅と

秋風の吹まくりあり古すどれ







よみまゝを可也ふと見たりけり

あふ似せり雪の梅かゝる

貞徳

そを移物作が造るのつくりおをりふ

又  
血まもひやす様はの池

其は日よけ汗をきつむ

宗鑑

身は日ひやまをけり暑き心なる水はくハ回き易し

旅の民をかゝる業あり

一雛を立圃の野々々之身は門入りて櫻葉教ふあり

出を能す京童と云名所記自車之立圃筑白あり花火草の作

者茲の追善九百韻の独吟

雪と指し跡のまや孫院ゆ来

手向ぬるサ化や九品の浄土経

春の日寺へあつる足あり

きり物の塵も霞もまを移る

一浪の松江の重軽ハ修維舟と号す毛吹草の作者櫻葉

何あそり諺曲の故あを長生一そ今柳治めを櫻葉

花より心やかに桐の梅

もめん帆やもろこし船も雲の岸

長生まの二句



千種深めの江

阿蘭陀の文字より横とよて沖

語書の江

峯入や雲子起れど頭中イキレも何

横切身徳所代

富士の雪見のつけよ返す禁哉

旅を仰きよ吸筒の酔

まゆとよつうふ雁野の好イコ子イコ

一徳の山本より西武ハ身体の門人かくれ簀かくれ笠綿中イコ袋等の

俳句を横

持まこふイコもや息杖イコ糸の束

一徳のうねり梅真ハ身体末の門人横集教あり

結句

梅子きと人子語ト人嵯峨の鮎

ホ玉千分巻既

花一本先よきとる千種哉

梅魚

外山の雪阿ちの型イコ也

偏真

いぬるイコも入日新イコ新もイコおれ

一徳の守身身室ハ中身追まいうれを和と一とせ加州山中の場

まろぐもや又ま誘とふもの子恥イコめト此物イコ治イコト身徳の末

の門人と志か佳くして終イコ子イコ人イコ子花の平を譲イコ身室と

名乗る一生書イコ重イコ号短冊をイコぶイコく買イコたり焼イコ指イコたりイコ是イコまで

世子自筆稿乙



そつくとはくり花のぐりの山と云名のをーたり其後  
琵琶一編をたえ東路のちもむきなり

跡の月みどり一程の雪や白土の雪と吟し武蔵子くた  
り隅甲川一見しそ

いざのがれ漢賦の點<sup>クヒ</sup>吟<sup>キ</sup>と都智  
独吟白詠

曙の葺<sup>クヒ</sup>壺ちづけー燦の山  
のぼるい草ーの露の玉階

霧暁る軒端の月影多しーそ  
ちめる踊の月のかきほこ

いぬる身如く越前寂<sup>クヒ</sup>の庵のちち<sup>クヒ</sup>は<sup>クヒ</sup>一そ貞室<sup>クヒ</sup>の人と  
かま<sup>クヒ</sup>貞室<sup>クヒ</sup>の人何よこのうち花の春をけ貞室<sup>クヒ</sup>子譲<sup>クヒ</sup>る身後  
血脈相<sup>クヒ</sup>結<sup>クヒ</sup>の糸<sup>クヒ</sup>なくく花の春はけ貞室<sup>クヒ</sup>あそ絶<sup>クヒ</sup>糸<sup>クヒ</sup>たし身  
傍<sup>クヒ</sup>と<sup>クヒ</sup>糸<sup>クヒ</sup>糸<sup>クヒ</sup>有<sup>クヒ</sup>糸<sup>クヒ</sup>子<sup>クヒ</sup>譲<sup>クヒ</sup>放<sup>クヒ</sup>身<sup>クヒ</sup>遠<sup>クヒ</sup>能<sup>クヒ</sup>造<sup>クヒ</sup>の<sup>クヒ</sup>何<sup>クヒ</sup>也<sup>クヒ</sup>なり

水草にいまこ花<sup>クヒ</sup>糸<sup>クヒ</sup>虫<sup>クヒ</sup>く<sup>クヒ</sup>ね  
独吟白詠  
散花<sup>クヒ</sup>を<sup>クヒ</sup>羽<sup>クヒ</sup>や<sup>クヒ</sup>一枚<sup>クヒ</sup>弱<sup>クヒ</sup>胡<sup>クヒ</sup>蝶<sup>クヒ</sup>

蜘蛛の糸<sup>クヒ</sup>こと<sup>クヒ</sup>と<sup>クヒ</sup>糸<sup>クヒ</sup>糸<sup>クヒ</sup>神<sup>クヒ</sup>の<sup>クヒ</sup>糸<sup>クヒ</sup>  
いあり<sup>クヒ</sup>糸<sup>クヒ</sup>糸<sup>クヒ</sup>に<sup>クヒ</sup>糸<sup>クヒ</sup>の<sup>クヒ</sup>雨<sup>クヒ</sup>と<sup>クヒ</sup>と

附の  
遠く<sup>クヒ</sup>い<sup>クヒ</sup>糸<sup>クヒ</sup>糸<sup>クヒ</sup>今<sup>クヒ</sup>朝<sup>クヒ</sup>の<sup>クヒ</sup>糸<sup>クヒ</sup>



道筋のいまうちある馬の番屋と云ふこととて方ばの馬の  
くせと云ふ名を聞きあり

一季吟考へは江見北村の産のち信子信生地下子何れを親字  
子長しあつくりさあ出り杳初舞あつくる信世のち道公人  
出せし多る故子未代地下子孫やう新玉博志の別当子任生  
殿重の比季吟湖喜親子若子江戸子呂れニ男正立子新玉博  
信の別当護る具徳老の門人たり能澄子長し天下に  
け流を多小能言教權を埋木を何れも一冬を侍授生

東山かをりやあまこ花の比

女郎花たふはあいの内侍哉

<sup>繪合</sup>地をかりは木のちの花の都の形 季吟

残る雪かと思ゆる白壁止 止立

卯辰町一冬の中方も妻明く 湖喜

木浜多降しく人宿の碎

秋空き門を初鞠や干つる 季吟

又 宮を敷麻の糸の下冷

去り痔はしく夜何りのうらま 全

一畠田將監ハ能澄に名ある人なり具徳の玉の産一とせ近侍



勢く市見舞中ぞこれれば

五月雨よあまこせきあれ美濃いものとはせりければ

何のこのよを様を袴つくりとふ服を付て申上り

れたり穿る能遊言々よ見たり

血紅ツユヒをさまや相の初もみち

尾花の圓りゆり袖のほ

月夜ふり踊きと人を催しそ

一堺のまな江戸の玄れ徳えハ同時の作者よし牡丹花の末

基ミのまのさつひんきうむゆる

徳え

あをう川木の花子待な

まな

ききぬよもほの垣根の掃除しそ

玄れ

一むうー守武宗鑑以来身まの能遊と心得

うづき来そ初ぶと子啼や節す

夕立や細首中ナ大井川ナなど言あつづくを末一と

まろゆナ子名多子腫如をち来し科カふき旅人の首をま移るあ

かひ一旬の卒徒を失り後子ナ身まるもゆるく尽く是より能

遊理居ナある

白く咲や二十四名の花の足



着之神伴達せし老の一ツ册

兼豊

如片理（注）のつゝをぬれば次の年一の歳且ハ何もかゝらぬ  
<sup>（注）</sup>とるのち一之流弟もまゝいりせむく成り初ッ元結と云  
附合出物を極附合を及住さとの極様子成り侍る又ハ老な  
し附などおのしりし何きど見る目もくる

つくり異（注）なるおとろ船差と云ふ册一白子

畑（注）トを達のもごをアト（一）はくりは畠羅子産服格

よもごを取リては常多るもの之四ツ平附嚙付能階の付合  
ハ多子極る諷をまゝいりの極り物語ともてまや一なるのかす

リ物語の附合を肝要とす

一 方坂宗因ハ西子也とも梅菴共つり天懐の天神月次連歌の

宗匠なりしが能階師と成古風の能階（注）扣（注）やぶり天地の事

独歩を世（注）奉（注）る宗匠（注）風と稱一面白かる

詠むとて花もい多一首の骨

花見子ハ老若男女きせると云

菰（注）をけハ蠅木子のほろ氣を何

独（注）柱ハ露骨を世（注）奉（注）るカア（注）の形

川ハき砂子のほろ涼風



酒の川 喉ノド通る子月せく

つづりふづれば霧をこぼる

四川 芳のいとしけ盆の花カケ

まろくふくや出の赤くさ

聖徳のふけ異りてハ又一くハ

阿の山梅ころのクーーこの

川人西歸由平ふど其風をうけをきりりめ成るをい

一り多太坂談林と号す

下霧や霧分別 ありふき所

宗因

霧の雲白の古くちき抱り後代これ程のりをいひせをき作  
者有然一其算をよる平のよ

何をふても六千一の秋と云句などハ未付不易として好乙

一談林軒 松島ハ江戸の産乙宗因を招き江戸談林と号し

トビテ 孫トビテと名付談林十百韻より 始王軒端の独活をのり俳出

日の変化を何とまは俳諧ハ師匠より 希子がまぐれ世の希

子よりハ又希子が上手と成る一字の動一の筆情善居ニ羨居せ

リハ時俳諧天下一統一を談林風をせぬ人なり

談林十百韻巻終

まれハま子談林の木何梅の花

梅の影



世俗眼眠をさあは

雪

雪采

朝霞多むこの烟横ふれそ

在安

雪のつらさ知るほとけの山風

一殊

詠むれハ借隠つらく暮の松

正友

附香菊散呂よりれく市野せよ

独学

ふかく旅人三休の夏

在安

並松の声さふくそをりか

雪采

磯打波のさかくあつき

正友

傾城を何ぞ夢ひの初ま丸切

志計

泪の淵をくぐるさいの目

一朝

十百韵いぞ打て人中見せむ山桜

雪采

〇く川いづやふゆ我天下のト涼

ト尺

〇夜も明むけんべき打んか下夜

正友

存云祥又ぬけ身ほとびのむのハ紅糸ふハかけ

一殊

公百韵花をふんそあそりうハ雪ハ割ハ声

出山

十百雪打やむうハあそりうハ雪ハ割ハ声

松島

栗うりめ目それとそや針のほそ

在安

上の子の手際ハそ乙めの一字子て栗栗をいまハめたる野上



千七世の最中よけ夕子かきりて牛類ハ同じ月もれとてやの言  
善ハ不破の菊屋のあのかきりこの比ハ名月の発分月月のあ  
のかきりを市一買取す月子何とぞるあ并初かきりの言もあハ  
平高子何とぞとて上平ハとぞる

夕立ちきりふ馬の背の別のふ

似ま

部子ハクや衣を馬の氷田

作ま不知

子の背あて宇母の山をぬけたり雪家隆々の夕霜まふの  
あはかきりなり其後ハ能後かとぬなり長なり風俣の变化  
日々夜くよあたる

一格の田中カ方矩ハ季吟ハ未なり後談林子禪

五首初巻既

蛇まが恨の鐘や花のくれとふ白を一と蛇まとふ

号をとけり破筆ちり取雑巾等の集を撰ま沼の談林ハ大

方方矩がハ弟なり

五首初巻既

昔ま子子代代神神子子跡跡しし月月見見哉

高下勢や引とも何かつて五首求

杖津るまりる雪折の舟

木枯や帝家考叙を吹まふ

一理理何何るる末末めめううききああり



始、何とぬの山栲鉢の谷とたえ伝き其中比り、巖山栲鉢とち  
しはけくや伝る

羽織ハヤマを端山ハヤマ勇河、花の時  
常規

上戸指にまけぶ夕、東風  
糸木

焼賜、継尾の就香の引、さまさく  
一味

雅中、のころ部もなふさうかふさう

姫血、三千の林檎、紅多あけし

とろ、一舟下戸、ろ山の花ハ春

夕声、や紅毛、あかかくあま上戸

附々、暈霞、添わけ小舟、棹さまや

切成名、カナテカ鉄挺テ良ク

又、ウモカケ仲の良、ウモカケ込む、ろ松、ちちく

聖の市、心フハクランあ、まこり、霍カ孔カ、発給

ところろ、ん、ス勧めをきこ、めをぬる

つね、小佐子、昔が西風、玉砂、下丸

一、惣平、地、方、改、江戸、誘、林、子、對、し、を、沼、の、惣、平、寺、の、名、何、江戸

躍、と、尔、独、吟、の、百、韻、あり

千代、の、松、か、ぞ、せり、産、の、神、々、樂



玉さき不雪の白木綿シラユラ

附今花前  
親類まき中納言との

合カモ花も紅多あもふりたり

一伴勢足代弘中、神職の人之語林の時上平の名有り

郭公き、ハ聞いとかほと、き埋す

藤のりても其さむるても其

百韻の附味句作り宗因ハ等

一語林より抄あり、能詮上子成平を尽し作をつくりたりを

此ハ長島のハ京も江戸も竹付、節を合せあるが如く極るをより

俳諧乱れ之免てかく、懐字のを集免詩をまき極み所又ハ字

何まり一息小りのハれぬ極なるるの成り京江戸田舎共ハみ

勿此立ち付時語林の能詮ナツホウ感之のちる

ダケ藏やく、香キやの若者花燈り

今宵の大將たり極たま、イモ此草を

了ふた水ハハ、イ護山ウのりカ悟

附天道や人道や女道や雲道や

又 殊オヤビカイ子カかりキハ、イ借勢界親仁界

教平蜘蛛此ハ朝敵の好免

シラユラ

松島

去肥オクマ

感イソモ

雅計

曉夕暮

五



蠅 ヒタカゲト 甲を並へて テイ 鱗上子列を

白温虎

一 信徳ハ古風ニシテ 諺林ヲ移シ 其後正風俾ノ比オデ長  
生々 俳諧ヲ好メリ

京三吟  
白蓮花 遠山ノ小法師ガ筆ニ多シ

江戸三吟  
初ノ名姓 蛸ヤ政々ノイカノ節

附分  
梓ノ子ニ 浅綿ヲウケ

柘柿 淡細ガ故ニ ありあり

千種ノ多クヤ 新ヲ正ツ 判

又  
墨子 筆ノ懺ノ 筆ヲセツケ たり

一 色ヲ引キ 海ノ賢人

一 江戸山 素堂ハ 陽ヲ云 江戸三吟ノ時ハ 信章ト云 遠山ハ 百韻ノ

節ハ 未雪ト云 芭蕉翁 柘青ヲ友 善後正風ノ俾ヲ云 尾

江戸三吟  
老松形 節 淨 玻璃ノ あり あり 花

附分  
目ノ前ニ 子 湯田 魚田ノ 三 漸 所

か 尻 七 づ ぐ ぬ 淵 あり あり

小 ぬ ぐ 小 大 蛇ノ 恨 鱗 形

カネ  
決メ あり つけ 場ト なり した かり

芭蕉翁 柘青ハ 俾 梨ノ 産 江戸 小 居 一 俳 諧 不 鳴 柘 青

信章

信徳

柘青

章



二十ふ仙と云ふ傳言を可くし

二十ふ仙傳言の内  
禮声波をう川に賜ある夜は

子をねもふ懸の其色あなりし

糸一糸二糸絃ハ志よむくときを年房を

下牛廟の花ハもミダリを紅乙クレナイ刻む

前後名をせし多る櫻集ハ二十ふ仙一部なり誘林の時能遊子

長し日々向上より上テ終り誘林を見破るは先正風俣

を見とけ神神恒貫之の平懐を探る好て

乃壁迎ムクケの木槿を馬ハ喰れ多りと申さるたりて下コソツ拳を

俳諧中奥の閑祖正風の公稱と稱傳る天下の門人教千人の

うち懐子正風の俣を得多るもの少し初懐細の江枚風嵐

其南嵐雪曾良等江戸に在る隨仕也

歌よせまゝ村松の志

有るは刑お折鳥帽子着たりウツ

又  
一輪ひらく芍薬の花

其名の工夫二日とちくる目を明かり

其は故々俣集ハ立返りたる道の紀を草枕とも型をしの紀

ハ其方博千形尚白妻亜三人俣を多れむ



幸縁の松ハ花より瞬子て午時のる乙名古屋にて野  
水荷すりつこの杜も多の日の俳諧を極し次の春の日打  
つらき曠野等のまいうれを勸む風俸多の日裏の日ハ初懐  
近一何と雖ハ御遊やふかき一そがかる

可也  
さいくふぐり文字の回も来る

いうめーき居此の木葉書

秘苑する子好瘦まかいなり

大垣如行 荊口等の門人招き師より秘苑をいしの紀の  
時乙其後わくの細道の時大垣より伴勢が辻安がみり別れとて

蛸の二見へわかれり 初ぞ

又江戸より諸門人正風の碑を勸む又悟子の不つぎ去  
来史邦凡北等を生き免

初時雨懐も小篋をかきけ乙

と吟して猿のを起す

とゆく一品がかりあるを

又 悟世の果ちる形小断乙

火燈にのぶれはくさる家の手

時多に形啼止まふなり



瘦骨のあつて<sup>起</sup>遊ぶる力なき

又 稲の美正の力なき風

発心の何一を子起る翁席山

膳所曲翠平正の玩硯等を引算るくひをこのまゝいふ有

大うと趣き猿篋子等一其後江戸より懐山芭蕉庵をゆへ

らびむすふ許六の時に懐山も玩硯江戸に未く懐山集の能隆を

極す

系舟の桃灯とめす朝霞

ゆきかゝる星川の橋

愚老が仙遊四五十年の後に三船ヶ橋子かを申されりて又考桃

隣に随仕し江戸より桃隣に江戸より歩み考に松崎安房

の旅子越り葛の松をを橋を聖坂利半孤をを越るのか

て炭俵お素多し

炭俵 日主と見ええを二十八月

ひとふきき殊軍のちるり也

又 柏實の七山むかりをふとられ

又 峠の山ある草石とる

又 秋月ふりて越る逢坂



減もせぬ舞治をのこせの店をいし

又江戸にて保生沾圃を勧め續猿蓑を千倍して伴紫水梅

八九空で雨降る押哉

昼猿の癖を並にかねり

智が来てはつともせびり地誌

中玉りの汁めま左右

朔日の日ハどこやう振舞ぬ

ひと羽織がうせて居る

又 見く用了紀三井ハ花の咲かす

荷持ひきりにととと永き日

こち風の又西なり北なり

かゝ手に脈をちるりかゝる

松風節別子別度おと云能澄何う方概續猿蓑と同じま

ういしゆき砂川の流る如くませよといり

別度者 五川がふれはめる女房

叶際も利上はうりにひる

まんあとか朝ハ鞠を系出す

又 玉々来ある人小物



身一ふ一白ついろ借まふ

コエカム  
番考汲白の降一ふなり

大坂珍碩を助けえ流七段の十月十日痢疾をうけつゝ  
難波の旅宿にて遷化を體を義仲寺に葬る僧大草惟  
然前考尼智月乙州が母國牛之醫國の一有が書なり猿蓑  
の比より階の方坂之道前考悟りて見ゆ三遷化の時之道  
羅吞舟心切子膏病を伴紫門人ハ故々なれハ其数おし  
加繁の北越ハねくの細道のこの三密沢より山中の場おで見送  
り方子毛早る子て追りけ案ミコトの道を尽せり名古屋の露

川東武下向の時ニやまをぬる也越中の浪化ハ渡成の湯  
柿舎子て冬令あり江東の赤子由も落柿舎子て見へ東武  
下向の時甲梅庵子漂泊一給ふ本子政村ハ方カタケガイ達してつゝ  
子逢を文通に木導をかこの正くの作者なりとな々和義  
あり路通荷分理あり越人木因等ハ動あるの川人なり其辭  
の川人ハ一三七の五よいと改めしを能證の因作ハ續猿ハダの  
子終る其趣相續し一年月の變化を察し一時代の其を  
簡くものハ一江東彦根の能證に極る其角が川人ハ其  
角が手節を残し嵐雪が川雪が手節を残し如馬  
尾野



類のま考ハ作あるものハ尽ると終ラしつゝお小己が作者ハ  
尽まつれ〜讀と変を諸風の能護も其所の宗匠の手  
節とありて桃青の血脈相續するものも稀乙

一枚記語

蕉門の手節日夜減〜付上りはくりぬるゆゑ  
けりむと多のこ心子かり傳る愚老病長日夜  
子せ悔里おなくの日教あり後代付記請文を枕とし  
棄的器の人の師匠もなく流弊もあらず一最  
初子多を習ふる子を習ふ〜を習ふ〜やこまわけ入る  
今の残る門人乏極これ也とあるゆゑ十人子連ふ時を  
十人のロゲたかふ何を以て芭蕉の流と決定せむかた  
此付書を末代子至るも蕉翁の手節口字といふハ







白き物を継分するなり先師の句一句までわけ合のな  
きをなり一布三喜子動く歌動のぬ知とふるのりきりけと取  
初より案あたるなりま風が陽備小動き理菊が極子に動  
くあぐひひとあのはれとと動く一決定の上まで手介  
初巻を改を句作るものなり又当流小まわりの誘うと  
とふるのちるのなり一磨くの門人、名を知りて一互  
るの和歌のう一ハモ歌の讀あくとふるのあるなりやん  
どあき歌仙達の作りを讀あくとふるを七下ぎれハ人のあいの  
差雲見へを自歌とあく一首讀あてもも悔ぐれはこ

りのより作りぬ侍るとふる俳諧子を相違あるをそれ  
どまのういの讀あくとふるなり階子かろぬゆるき句い  
讀うとふるあ上りなり一手柄あきるのハ上平の句ハなし  
きとぬ人かぢのまが心ハ好きとふるばかりを上句と生この  
讀あくとふるヤ百習ひてハ知りあくとふる地なり涼の語ハ  
袖ぬきとふるのどぐひなり一布四ハ連俳を季節の辭を題  
とす初巻も身帯を符とつども発句ハなりぬらるのち  
ハ一秋の寄巻のハのあぐひ似と事ハて巻の理歌の  
野ハ類なり先師大根引を題ハなりととて大根引と







排謔格別

いふく守武宗鑑より二枚ありといひの言ふとふ物  
一通り有りて上へをりトモへやり其れ少く何多しと  
を付て書ける宗祇の例の板より二枚ありと申しされぬも  
是なり其家より子吟時代のもといひを見るに今の  
歴く芭門の宗匠達といひせざる事かさ悔で変りて  
きくく飄飄乎子孫もせむ何う面白くとくする事  
之や先師世にまといひ三合はかせ七合を残りありと  
中をいりて柘先師排謔ハ格別ハ一ハ世の中はまの



クハといふ事なりといふ事一（どう）かあまの能達ハ御  
達の道具一通りありて是よて人情を多かりとて組合  
せよといふいとく言並べたる物之先押一のまといハ人  
情平話のよく人の通ずる辞一後（う）よてなまのを梅  
一（せ）むのし（の）能達の形悟合ハ切方めくやある  
物なり後代の学者世るのまといといふ事（成）所をな  
して工夫をめぐらし眼を何き（う）す（う）一とせ芭蕉  
庵まで三吟一まといありたる時

室菊此隣も何（や）つけ方根

評一六

室菊につけ方根同（と）り合せなり

多（ま）や一筆（ひ）る北窓心の燦 箱

け白世間燦を雪とする句なり燦の一字まといハ  
讀（よ）み（し）を連人の手柄とすハ（ま）なり（と）ぬ人ハ  
等（ナ）サリ見通一蕉（じ）の不可思議を（ま）す（ま）す三嵐蘭  
子（こ）何これ王教割案一（ま）をれ（ま）せ（ま）後（の）宿（の）よ  
せるふど（ま）を（ま）け（ま）横（の）路（の）ま（ま）入（る）と申（を）れ（ま）け  
れハ先押（の）い（ま）よ（ま）馬（と）す（ま）物（を）（ま）何（千）な（ま）候  
や（ま）す（ま）世（の）三（ま）合（の）う（ま）也（と）申（を）れ（ま）ハ



在々より霞く馬をつれ来り定々うせ申と嵐菊か  
を祇々やをれりれは志趣の地帯のうせ申と三子て侍る  
なりとて

月をふき霞く馬をつきて来て 嵐菊

と先師の作りやをりなりと名も人情平話の道具  
をのりてまいつれの形格合り切り名せせたるもの  
知るなり後代の人けをよく得心とてば猿蓑は後  
の四五集明く小埒明也又埒のまいつれり

綿とて並ぶ多向の里と不服の世る多枯の里

とする句なりと三合のうちなり平話に其向多むきと  
はふなりといふはつおかせず名讀の一手柄なり他  
に子て其向多向と不はる古とて人のいハぬ其向秋  
向新しき成と不はる此のぬぐひ無理なりを正風ハあ  
る後ハハハも人も面白き所とせと斯也先師とい  
うのあさしく面白き所を得心とあるものハ東花坊  
一人なり其の録のハ人宗匠達夢ハ知とせとれど  
其坊不実経落也と先師を坊うりて後の上手ハ  
成るものなり百韻のうちハ十句を聞るなりと天睦

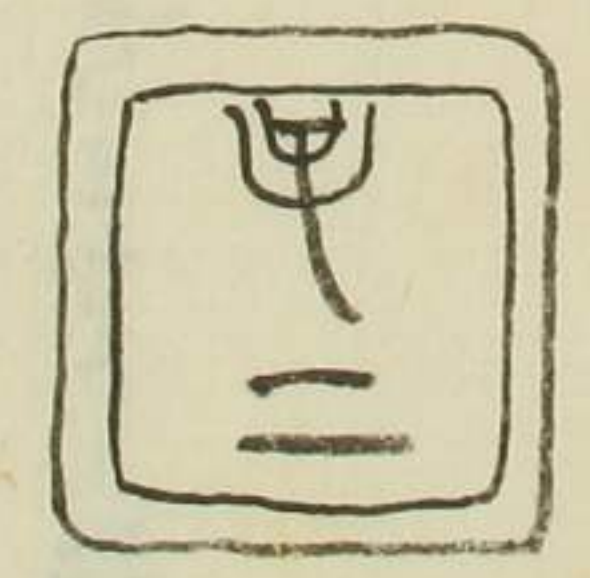






が宇陀法師撰る時二十ヶ条ありの秘訣ありし  
 言くれよと多のむ更<sup>ニ</sup>書記<sup>ニ</sup>たる相なり<sup>ニ</sup>能<sup>ク</sup>護<sup>ル</sup>大<sup>ニ</sup>秘訣<sup>ト</sup>  
 系<sup>ハ</sup>愚<sup>ク</sup>老<sup>シ</sup>一人<sup>ノ</sup>傳<sup>ヘ</sup>終<sup>ル</sup>二<sup>ノ</sup>卷<sup>ノ</sup>の書<sup>ヨリ</sup>あり<sup>シ</sup>先<sup>ニ</sup>師<sup>ノ</sup>のま<sup>ニ</sup>  
 の以<sup>テ</sup>口<sup>ヲ</sup>寫<sup>シ</sup>を<sup>レ</sup>聞<sup>ク</sup>と<sup>ル</sup>廿<sup>ノ</sup>韻<sup>ノ</sup>目<sup>ノ</sup>韻<sup>ノ</sup>卷<sup>ノ</sup>面<sup>ニ</sup>に<sup>テ</sup>言<sup>ハ</sup>低<sup>ク</sup>あり<sup>テ</sup>退<sup>ル</sup>居<sup>セ</sup>  
 せ<sup>テ</sup>か<sup>モ</sup>新<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>終<sup>ル</sup>世<sup>ニ</sup>せ<sup>メ</sup>せ<sup>メ</sup>ぬ<sup>モ</sup>い<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>を<sup>レ</sup>並<sup>ベ</sup>衰<sup>ハ</sup>る<sup>所</sup>ハ<sup>ハ</sup>  
 此<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>述<sup>ベ</sup>せ<sup>ズ</sup>し<sup>キ</sup>と<sup>ル</sup>所<sup>ニ</sup>ハ<sup>ハ</sup>淋<sup>シ</sup>し<sup>キ</sup>を<sup>レ</sup>傷<sup>ム</sup>滑<sup>シ</sup>整<sup>シ</sup>の<sup>ハ</sup>う<sup>シ</sup>  
 之<sup>レ</sup>面<sup>ニ</sup>自<sup>ラ</sup>に<sup>テ</sup>什<sup>ノ</sup>等<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>自由<sup>ニ</sup>する<sup>もの</sup>ハ<sup>ハ</sup>五<sup>ノ</sup>老<sup>ノ</sup>井<sup>ノ</sup>一人<sup>ナリ</sup>発<sup>句</sup>の  
 自由<sup>ヲ</sup>を得<sup>た</sup>もの<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>作<sup>意</sup>を<sup>レ</sup>尽<sup>ス</sup>文章<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>多<sup>ク</sup>せ<sup>メ</sup>  
 かく<sup>の</sup>もの<sup>ハ</sup>評<sup>ハ</sup>た<sup>る</sup>なり<sup>正</sup>風<sup>血</sup>脈<sup>の</sup>門<sup>人</sup>なり<sup>芭</sup>蕉<sup>翁</sup>二  
 代<sup>目</sup>とい<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>に<sup>く</sup>か<sup>ら</sup>む<sup>々</sup>一<sup>時</sup>正<sup>徳</sup>永<sup>正</sup>末<sup>の</sup>秋<sup>八</sup>月<sup>十</sup>  
 四<sup>日</sup>に<sup>夜</sup>病<sup>床</sup>に<sup>お</sup>ぬ<sup>る</sup>論<sup>之</sup>

辞也



一時<sup>ニ</sup>打破<sup>ス</sup>屎<sup>糞</sup>壺<sup>ノ</sup>  
 芬<sup>々</sup>臭<sup>気</sup>供<sup>養</sup>梵<sup>天</sup>  
 下手<sup>ハ</sup>は<sup>り</sup>死<sup>ぬ</sup>る<sup>事</sup>と  
 上手<sup>モ</sup>死<sup>ぬ</sup>る<sup>事</sup>と  
 上手<sup>モ</sup>死<sup>ぬ</sup>る<sup>事</sup>と<sup>上</sup>手<sup>ナ</sup>り

菊<sup>陀</sup>佛<sup>未</sup>期<sup>言</sup>







る道きなどのゆりつゝ〜牛のを喰ひてゐるに色相シキサウをは赤  
川たる所一息心の及ぶ道きにあつてを有つてくるゆゑ

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

丑老先生病衰日夜よせ悔りニク〜の秋八月廿五日の身  
悔り結ぶ世よ仲友の死せる時追善の集つくるゆゑいし  
へかきあるゆゑ〜を大きに古〜先師遺言中〜と今  
追善の集つくるゆゑを孝由辻化の時もつくりて汶村卒  
〜ある折もせむ只以下打〜ひにかき悼むゆゑきりし  
作らるれりゆゑ追善の集り



十時止傳五乙未秋九月謹書寫之

五老井門人

のく茶店

枇杷巷

横斜庵

第九蓮寺

野田路多傍板

治

越

孟

雲

天

園

遠

鈴



